

19世紀初頭のドイツ語圏における音画概念

—— コッホ『音楽事典』にみるその両義的評価

柴田 蒼良 (東京大学)

本発表は、ハインリッヒ・クリストフ・コッホ Heinrich Christoph Koch (1749~1816)『音楽事典 Musikalisches Lexikon』(1802)の項目「音画 Malerey, oder musikalische Gemälde」をとおして、音画概念がどのように理解されていたか、思想的側面において明らかにするものである。

音画論において重要な人物として、ヨハン・ゲオルク・ズルツァー Johann Georg Sulzer (1720~79)とヨハン・ヤーコプ・エンゲル Johann Jakob Engel (1741~1802)を挙げることができる (Will 2002)。コッホの事典項目にエンゲルの著作が参考文献として掲載されていたり、コッホとズルツァーの用いる語彙が類似していたりする点で、音画論におけるコッホはズルツァーやエンゲルの影響を受けていた (Mirka 2014)。コッホの『音楽事典』そのものの大きな影響力は周知の通りであるが、コッホが音画論の重要な議論を引き受けている点からも、同時代の音画概念を考察するにあたって、コッホの議論に注目する価値があると言えることができる。

音画概念そのものに目を向けるならば、*Grove Music Online*における「音画 Tonmalerei」の項目の記述はごく僅かであり、また「交響詩 symphonic poem」の項目の参照が求められているため、18世紀後半から19世紀初頭にかけての音画の理解を十分に説明できているとは言い難い。また、音画のような描写的表現は、当時の批評家たちによって否定的に受け止められる傾向にあった (土田 2010) 一方で、同時期に描写的要素を含む作品が数多く作曲されていたため、中にはこれらの作品を擁護しようと試みる議論も存在した。このように、音画をめぐる、思想と実践の間だけではなく、音画に関する諸思想の間にも〈捻れ〉が生じていた。

これらの点を踏まえ、本発表ではコッホの事典項目に見られる音画批判と音画擁護という両義的評価を次のように明らかにする。まず、ゴットホルト・エフライム・レッシング Gotthold Ephraim Lessing (1729~81)の『ラオコーン Laocoon』(1766)における「詩的絵画 poetische Gemälde」の議論と、音画の議論が同じ構図で語られていることを指摘し、音画が「副次的な諸事柄」へと注意を逸らしてしまう点で批判されていることを確認する。他方で、「魂の状態それ自体の描写」や「感情の動きの表現」としての音画という側面に着目し、ここに「諸感情を描出する」という音楽の目的に合っているものとして音画を肯定的に捉える可能性があったことを指摘する。